加治川ネット２１会報誌

２００４年１０月３１日発行

カジカの学君（まなぶ）

Ｖｏｌ．２５

発行元　特定非営利活動法人　加治川ネット２１
〒957-0345　新潟県新発田市小戸886-1　TEL0254-31-4111　FAX31-4088
ﾎｰﾑﾍﾟｰｼﾞ　URL http://www.inet-shibata.or.jp/~kjn21/　E-mail kjn21@ml.shibata.ne.jp

会費振込先　郵便局振替口座　00500－5－35812　株式会社第四銀行 新発田東支店 普通口座1196959

『新潟県中越地震』復興支援募金のお願い

初冬の候、みなさまにおかれましてはご健勝のこととお喜び申し上げます

さて、１０月２３日新潟県長岡市周辺を震源地とする「新潟県中越地震」がおきました。自然災害と一言でいっても、被災されたみなさんにとってはとても言葉で表せないくらい、つらいく切ない出来事だったと思います。私たちの新発田地域は、おかげさまで大した被害はありませんでしたが、同郷である新潟県人として何かしてあげたいと思っています。

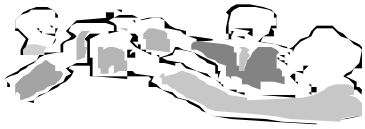
そこで加治川ネット２１で義援金を募りNPO法人新潟NPO協会「新潟県中越地震ボランティア活動基金」に贈る事にしました。みなさまのご理解とご支援をお願いいたします。

なお、本誌の発送にあたり振込用紙を同封させていただきます。ご協力いただける場合には、振込用紙の通信欄に『義援金』、『募金』などコメントを書いて振り込んでください。

理事長　若　月　学

’０４年　忘年会開催のおしらせ!!

一年間の技術部事業と文化部事業の反省と来期の展望を語らいませんか？
まだ会員でない方もお誘い合わせのうえ、ご参加ください。



〇と　き　０４年１２月　４日（土曜日）
　　午後６：３０～
〇会　費　４０００円
〇ところ　本田屋食堂　新発田駅前　電話 0254-22-3873（住所：新発田市本町1-1-3）

加治川ネット２１の活動

２００４年　７月　１日～　９月３０日

7月の事業

７月　２日　「イバラトミヨ共生型ほ場整備現場」：秋田県千畑町視察
７月　３日　「イバラトミヨ共生型まちづくり」：山形県遊佐町視察
７月　７日　「荒川水系流域連携事業」打合せ
７月　８日　定例会
７月１５日　「荒川水系流域連携事業」現場踏査
７月１７日　第１回佐々木ＷＳ「古太田川の植物を知る」開催
７月１９日　第１回加治川の恵みＷＳ（県振興局）
７月２０日　佐々木ＷＳ発表会「古太田川植物について」：地区センター
７月２５日　水辺の大楽校「ぼくらは加治川探検隊」開催
７月３０日　「荒川水系流域連携事業」最終打合せ
７月３１日　新潟市上所自治会「鳥屋野潟自然学習」開催

8月の事業

８月　３日　あらかわ清流大発見「荒川水系流域連携事業」開催
８月　４日　水環境フェア2004in新潟　パネル展出展
８月　５日　定例会
８月　７日　第２回佐々木ＷＳ「古太田川のいきものを知る」開催
８月１０日　滝谷地区と打合せ：「加治川を食べる」打合せ
８月１１日　佐々木ＷＳの打合せ:水土里ネット佐々木
８月２０日　新発田市立佐々木小学校「WS発表会について」打合せ
８月２１日　新潟市立大淵小学校第「加治川・五十公野公園探検」開催
８月２２日　第２回加治川の恵みワークショップ（県振興局）
８月２３日　朝日新聞掲載：「新発田の自然子孫に残そう」
８月２４日　市民育樹祭「サクラマスの森」協議会：会議
８月２８日　田貝ホタルの会：打合せ
８月２９日　第２回「やろってば！わいわいｶﾞﾔｶﾞﾔ寄ったかり」出演

9月の事業

９月　３日　定例会
９月　８日　新発田広域’０４環境フェア　第２回実行委員会
９月１３日　第３回佐々木ＷＳの運営会
９月１５日　佐々木地区第３回ＷＳ「ホタル舞う古太田川を」開催
９月１８日　滝谷地区「加治川を食べる集い」開催
９月２４日　第４回佐々木地区ＷＳ「田貝ホタルの会」と交流
９月２５日　『第２回トゲウオ全国サミットin大野』
９月２６日　『０４新発田広域環境フェア』開催
９月２６日　第３回加治川の恵みＷＳ（県振興局）
９月２８日　五泉南小学校３年：新発田市六日町「イバラトミヨ生息調査」
９月３０日　朝日新聞掲載：「ホタル戻って」カワニナ放流

秋田県交流『ハリザッコよいつまでも』

７月２日、ほ場整備工事と共存する雄物型イバラトミヨの現状掌握のため加治川ネット２１技術部の主催事業として新発田市農林課、環境推進課が同行して、秋田県千畑町へ視察に行ってきました。

清水所長さんから概要説明

説明は、秋田県仙北平野農村整備事務所職員、千畑町役場農林課職員、土崎小荒川地区環境保全連絡会議会長、秋田県立短期大学の神宮字助教授、地元保全協議会会員のみなさんのから現地を案内していただきました。

千畑町では０４年度完成したばかりの保全池を見ることが出来ました。同町では、古くから奥羽山脈からの『湧泉』（わき水）が豊富で田んぼの用水の多くは湧泉を利用して稲作が営まれてきました。ここでも基盤整備事業によるコンクリート製品の排水路（U字溝）の布設や排水路掘削時に湧泉の地下水脈が分断されるなど工事での障害により、多様な生き物たちが消滅の危機に瀕したとのことです。雄物型イバラトミヨの生育範囲はとても狭く、秋田県でも限られた土地にしか生息していない絶滅危惧種ＡＩ類だそうです。そのとき神宮字先生たちが、地元の方たちに絶滅危惧種がたくさんいることのすばらしさを説き、秋田県の協力を得て、保全型農業を優遇・補助する制度を創ったそうです。

水源地の一つ古シズ

また、現地では地元の方たちからよく冷えた「キュウリ漬け」と「なす漬け」をふるまっていただきました。

地元の方々は「たくさんの生き物がいることで、自分たちの地域にいろいろな地域の人たちが訪れてくれる。本当に良い地域だと自負している」と誇らしげに語っていました。また、イバラトミヨがすむすばらしい環境を介して秋田県と新潟県でネットワークを組むことも呼びかけられました。短い時間の研修でしたが、地元耕作者の方たちからいろいろな話や将来の夢を聞くことが出来ました。秋田県の関係者の皆さん本当にお世話になりました。ありがとうございました。

山形県交流『トゲヨいっぱい八ッ面川』

７月３日、山形県遊佐町の街中で『イバラトミヨと共存するまちづくり』を視察してました。

遊佐町では、月光川の魚出版会の会長本間さんと鈴木康之さんにお話を聞くことができました。

八ッ面川は少し前まで遊佐町の重要な農業用水路でしたが、住宅からの生活排水の流入により川が汚れ進んできたため、用水路と排水路を分流することになったそうです。

イバラトミヨをはじめとする多様な生物の保全を訴えた結果、住宅街を流れる排水路で『生き物たちの生息環境』と住民の『ぎりぎりの意向』が水路工事に反映されました。

八ッ面川は鳥海山の麓に位置するため湧き水が自噴し水温は１７℃、新発田市太斎地区天辻川によく形態の河川でした。また、川の幅や大きさは『新発田川』にも良く似ていたことも付け加えておきます。でもこの川にはよく見ると錦鯉の稚魚が泳いでいたり、金魚、オイカワ、メダカが泳いでいたりいろんなコンセプトがありおもしろい川でした。

この遊佐町での交流をとおして川を健全な環境にすることが、地域の人々に誇りを与えてくれることを実感しました。

※遊佐町ではイバラトミヨを「トゲヨ」「トゲオ」呼んでいます

「第2回トゲウオサミット」in大野

－秋篠宮殿下にビールを注いでしまいました－

９月２５日（土）、「第２回トゲウオ全国サミット」が福井県大野市で開催されました。
トゲウオとは、イトヨ、ハリヨ、イバラトミヨなどトゲウオ科に属する魚の総称で、水温２０℃以下の湧水地帯のみに生息するため、地域の飲料水、生活用水、農業用水など良好な水環境の指標種として注目されている魚です。全国的にその生息環境である湧水が減少していることから生息地が激減し、そんほとんどが天然記念物や絶滅危惧種に指定されています。加治川流域においても０２年８月に新発田市六日町地区でイバラトミヨが再確認され、加治川ネット21でもその生息状況調査と環境保全活動を行ってきました。その活動が評価され、新潟県からは「五泉トゲソを守る会」と加治川ネット２１（渡辺理事、藤田理事）が、このサミットに参加することになりました。

秋篠宮殿下のご挨拶

歓迎レセプションには加治川ネット２１も来賓として招待され、参加した二人も秋篠宮殿下と会食することになりました。会場は「平服で参加」との指示だったので一応スーツを着用したのですが、紹介されたときに渡辺理事が「我々二人はネクタイはしていますが、足下はスニーカーで･･･」とスピーチしたたため、殿下は我々の足下を「ジー」と見ておられたとのこと。ちょっとはずかしい場面でした。

その後会食が進み、渡辺理事が殿下にビールをお注ぎして･････

渡辺「殿下は福島潟に来られましたよね。われわれはその隣の市から来ました。」**殿下**「はい、かつておじゃましました。有名な植物がありますよね。」**藤田**「オニバスはありますが、オオヒシクイの生息地としては有名です。新潟県ではイトヨを食べるんですよ、子供の頃はよく釣りました。」**殿下**「えっ、イトヨを食べるのですか？どのように調理して食べるのですか？」**藤田**「塩焼きか唐揚げです。」**殿下**「スパイン（棘）はどうされるのですか？」**藤田**「（われわれ平民は）気にせず食べます。はずして食べる人もいますが。」**殿下**「食は文化です。ぜひ、記録として残しておいてください。」

というやりとりがありました。殿下は水域を中心とした環境保全に非常に関心がおありとのことでした。それにしても、殿下が御成になるということで、Ｓ．Ｐの方々は目を光らせているし、大野市の職員は大わらわでしたし、市長はじめ、知事、副知事も参加するなど「たかがトゲウオ」のために大変な会議でした。でも、「トゲウオの住める環境」にはそれだけの価値があることを感じました。

新潟県から参加した「五泉トゲソの会」
「加治川ネット２１」の精鋭達

総合地球環境学研究所の秋道教授、文化庁の花井文化財調査官から「トゲウオの住める環境が大切、地域の宝」といった内容の講演があり、その後、地元小学校の総合学習の成果の寸劇がありました。

参加者代表発表やパネルディスカッションでは、全国の保全状況や地域の保全団体の苦労や努力が伝わってきて大変有意義でした。なかでもイバラトミヨの亜種のムサシトミヨは、生息環境がなくなりかつてのトキ状態とのこと、「失われた自然を取り戻すことは守ることよりずっと大変」ということが伝わってきました。また、新潟県を代表して世界的（？）なイトヨ研究者の樋口さん（五泉トゲソを守る会）が新潟の食文化としてのイトヨを紹介してくれました。

コーディネーターの森館長の好リードで無事会議は終了しましたが、最後に殿下が「トゲウオ学」を興したらどうかと提案され、会場が盛り上がったまま閉会となりました。

新発田から片道約500㎞と大変遠い大野市ですが、石畳の散策路に城有り、寺町有り、朝市有り、そして湧き水有りと歴史と自然の豊かさを感じる町でした。残念ながら新発田市は、湧き水が少なくイバラトミヨの住む環境は決して良いとはいえません。バラトミヨは豊かな里山、里地、農地のシンボルです。イバラトミヨが生息できる空間は地域の財産です。みんなで守っていきたいですね。

ようこそ新発田へ五泉南小！

五泉南小学校の生徒がイバラトミヨに会いに六日町に来ました 。

９月２８日晴天。今日は、『五泉トゲソの会』の引率で五泉南小学校３年生の子供達（９３名）が、新発田市の六日町にやってきました。出迎えたのは、もちろん加治川ネット２１！

大型バス２台の大所帯でやってきた来たみんなを出迎えて、県道脇のほ場整備事業を横目に見ながら、早速、六日町集落へ。道みち、「この川にもイバラトミヨがいるんだよ」「川底に見えるきれいな水草はバイカモといいます」など先導する藤田さんの説明を聞きながら、子供達は「五泉より水の流れが速～い！」「六日町って五泉より田舎だよね」などおしゃべりをしながら賑やかに移動。途中、生き物の捕獲に精を出していたいきもの担当の阿部さんと合流し、八幡神社前に到着。

新発田のイバラトミヨだよ

五泉との違いを調べよう

生き物を前にソワソワしながら朝の挨拶を済ませて、学習開始。

最初に六日町で捕獲した生き物と六日町周辺の環境について「ここにはたくさんの生き物たちがいますが、イバラトミヨはこの集落の人たちと一緒に生活しています。だから、イバラトミヨがこれからも一緒に棲めるような環境をみんなで守っていく必要があるんですね。ここ六日町の集落の環境の良いところをよく観察して、五泉地域の環境と比較してみてください」とひと通り説明があり、話を終えると、「自分で捕まえてみたい人」の質問に子供たちから大きな返事が返ってきたため、急遽みんなで生き物調査をすることになりました。

よく見てごらん、元気でしょう

網ですくってみよう

今日は、ありがとうございました

箱めがねや網などが貸し出され、みんなで調査に乗りだしましたが、生き物たちはたくさんの人影に驚き隠れたようで思うように捕まりません。それでも、「みんなも捕まりたくない魚たちの気持ちになってみて、どんなところに隠れてるのかな？」などと助言を受けながら、貝類やヨコエビなど、数種類の小さな生き物たちを捕まえては歓声をあげてました。

調査中に随時、子供たちからの質問を受付て答えていくという方法で、約３０分程度の学習となりましたが、最後の挨拶で「みんなの疑問は解けましたか？私は、解けました。今日は学習のお手伝いをしてくれた加治川ネット２１のみなさんありがとうございました」と子供達からすてきなお礼の言葉をいただきました。五泉南小学校の皆さん、ぜひ、また遊びに来てくださいね！

都市と山村文化交流事業

自然いっぱい・滝谷を歩こう

今年から始まった『加治川の恵み』は、加治川流域の各地域におじゃまして、人と人との交流から食文化や歴史を学ぼうというおいしい企画、第１弾は９月１８日に『滝谷』で開催されました。

滝谷は加治川の最上流域の集落、焼峰山の登山口としては県外でも有名です。滝谷では、緑に囲まれた静かな山間集落そのままの姿を見ることが出来ますが、加治川を挟んで対岸には、かつての赤谷鉱山が広がり、緑豊かなこの集落も冬には２ｍを超す雪に覆われます。春にはこの雪解けの水が、加治川をとおして私たちの暮らす水田地帯を潤しているのですね。そんな、滝谷地域を佐久間忠一さんに案内をしていただきました。

大慶寺にて『いっぷく』

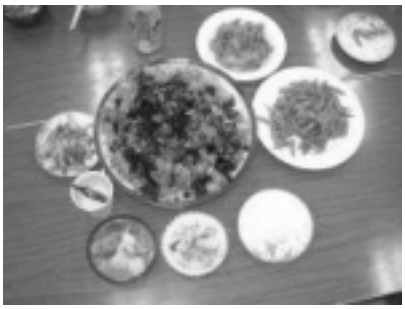
最初に向かったのは、中条町の大輪寺の末寺にあたる大慶寺。木立に囲まれた境内に佇む大きなお堂を拝見しながらお茶をいただいてほっと一息。道行く家々にはいろいろな趣があり古き良き歴史を感じさせる風情があります。しかしながら、かつて７０数軒あった集落も現在では３４軒とのこと。しかしながら、滝谷からはたくさんの素晴らしい人材を輩出しているんですよ。

※(株)ウオロクの創始者：前寺（屋号）ふじ江氏、赤谷線全通に私財を投じ尽力した阿部誠之助氏など

歩いているとユニークな庭木を発見！
なんと、講師の佐久間さんのお庭でした。また、集落への道のりを彩るコスモスは２０年間も星さん（滝谷地区副区長）が一人でお手入れを行っているとのこと、滝谷へ訪れる方々への心配りも嬉しいですね。立ち話に花を咲かせながらも散策は約１時間で終了。

戻ってからは、佐久間さんお手製の資料を見ながら、滝谷について１０分程度の復習です。

佐久間さんの「地域を知っていればこそ、愛情を持って地域の将来を考えることが出来る」「神社やお寺などが地域をつないできた」「この滝谷の環境の良さ、風土の良さがすばらしい人々を育んできた。豊かな心を育むのにこの豊かな自然環境が関係するのではないか」という佐久間さんの言葉がとても印象的でした。



さて、続いてはお待ちかねの夕食懇談会です。夕食懇談会からのおいしい参加者も３名加わって、腕によりをかけてこしらえた献立はどれもおいしく、何杯もおかわりをしている人もいました。『熊汁』も噂のような臭みもなくて、柔らかくおいしいお汁に出来あがりました。また、『カジカ酒』は芳香な香りで味も最高に良くおいしかったですよ。みなさんには、写真しかお見せできませんが、次の加治川の恵みには是非参加して、一緒に舌鼓を打ちましょう。

内の倉ダム湖クリーン作戦

１０月１０日、秋晴れの中、新菖ライオンズクラブ主催の内ノ倉ダム湖クリーン作戦が開催され、約７０名（ネットから８名）が参加者ました。

ゴミ拾いをしながら歩く道端にはポイ捨てと思われる吸い殻の他に『鉄の波トタン』なども回収され、４トントラック１台分のゴミが集められました。

この内の倉湖の水は、新発田市民の水道水をはじめ、農業、工業に使われている大切な水である事をもう一度考えてはいかがでしょうか？

第1回佐々木WS『古太田川植物を知る』

７月１７日、新発田市佐々木地区「子どもたちの水辺環境体験学習」が、下興野集落開発センターを会場に開催されました。この事業は「水土里ネット佐々木」から委託された事業で、農業地域の佐々木地区（古太田川）を調査しながら、１年間かけて地域の環境を考えて行く予定です。

当日は主催者「水土里ネット佐々木」の塩原理事長さんから開会の挨拶をいただき、古太田川の植物図鑑が配布された後、前日の新潟・福島豪雨の余波が残る雨空の中、元気に野外での体験学習が始まりました。

おもしろい植物がたくさんあるよ

みんなでホオズキ笛に挑戦

会場から下流に向かって神明神社で折り返し、上流の太田川へ向いました。古太田川は下興野集落の真中を流れ両岸に道路があり、全戸が川に向いて建っています。

今でも人が川とつき合いながら生活している新発田でも数少ない地域です。

古太田川にはミクリが揺らぎ、川沿いには、ほおずきや梅などが植えてありました。

昼食後、３班に分かれ古太田川の現状を大きい紙に描きました。現状から見る古太田川から、未来のすばらしい「古太田川」へメッセージを送ることができました。

第2回佐々木WS『古太田川の生き物調査』

８月７日、２回目のﾜｰｸｼｮｯﾌﾟが開催され、子供たちと一緒に古太田川の生き物調査を行いました。

当日の古太田川は藻（水草）刈りが終わったばかりの状態で、路上からオイカワやアブラハヤなどの魚影をウォッチングできました。ちょっと目をこらして見ると沢山のアメリカザリガニも確認されました。

う～ん、なかなか獲れないな

ワクワクしながら子供たちは川に網を入れるのですが漁果はいまひとつ。その中でもさすが！生き物担当の阿部さんや藤田さんは着実にドジョウやアブラハヤなどを次々と捕まえていきます。

午前中で魚の捕獲を終え、午後からは各班で捕獲した生き物の観察会と分布図を作り、古太田川の生き物から見る未来像などを話し合いました。

〔子供たちの感想〕

・川に入ったり、魚をつかまえたりしておもしろかった。

・いろいろな魚がいてびっくりした。

・自分では捕まえられなかったけど、思っていたよりたくさん生き物がいて楽しかった。

・いつも見られない魚や見たことがあるけれど名前のわからなかったものがわかりおもしろかったです。

もっと生き物を知り、明るい川にしていきたいと思いました。

など、子供たちは古太田川の多様な生き物の多さに驚いたとともに、古太田川が生き物の生息域として大切な役割を果たしていることに感心していました。

第3回佐々木WS『ホタル舞う古太田川を夢見て』

９月１５日（水）、佐々木地区での第３回目の学習が行われました。最初の１時間は、これまでに行った古太田川の動植物調査をもとにして古太田川がどんな川だったのかをもう一度みんなで確認しました。

１限目、永野先生から生き物のまとめ

調査のときに見つかった生き物たちが写真で紹介されると、写真だけでも名前がわかる子供たちも大勢いました。また、魚の特長（口の形、色、ウロコの大きさ、体の模様など）によって種類を見分けるコツも紹介され、最後には、きれいな川の象徴としてホタルのお話があり「みんなは古太田川でホタルが見たいですか？」の質問に子供たちの手があがっていました。

２限目、植木先生からホタルについて

２限目は、みんなの声をうけてホタルについてもう少し詳しく、ホタルは幼生で冬を越し、成虫では１週間くらいしか生きられないこと、また、ホタルが生きるためには幼生のエサになるカワニナの他に卵を産みつける水辺のコケ、陸にあがれるような岸辺が必要なことなどを学びました。
最後に「ホタルはとても小さい生き物ですから、少しの環境の変化でも生きていくことができなくなることもあるんです。だから、ホタルが生きられる環境は、とても良い環境だと思いますよ。」と締めくくられました。

第4回佐々木WS『ホタル舞う里山「田貝」との交流』

９月２４日、第４回目の佐々木地区ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟが開催されました。今回はホタルの舞う里山の環境について学習するため、佐々木小学校の６年生が佐々木地区の方々と一緒に田貝地区を訪れました。

当日は『田貝ホタルの会』の倉島さんと築井さんが出迎えくてれましたが、佐々木地区から参加した（大人も子供も）みんながバスから降りてビックリしたことがあります。何だと思いますか？

答えは、気温（体感温度）。学校の前では「今日は暑いので気をつけましょう」と挨拶して出てきたばかりなのに、田貝のなんと涼しいこと…。同じように太陽が照りつけていても、二王子山の木々に冷やされたダシ風が吹き通していきます。これぞ、天然のクーラーですね。

田貝で最初に行ったのは毎年ホタルが舞う水路でカワニナを採取すること。

カワニナを「ゲット」しました

子供達は、待ちきれない様子で網やバケツを手に水路へと走っていきました。みんなが思っていたより、とても小さな小川（田んぼ脇の小水路）でしたが、川底は砂地で、とてもきれいな水が流れていました。子供達も網や素手で捕まえた沢山のカワニナをお互いに見せ合ってご満悦。やっぱり手が届くところに生き物がいる環境は、楽しいですね。子供たちの笑顔が生き生きとしていました。１５分程度の短い時間でしたが沢山のカワニナを捕まえて、今度はゆっくりとホタルの棲んでいる環境の観察です。山際の水路を２０分くらいかけて、ゆっくりと観察しながら田貝地区公会堂まで移動しました。

水路にたくさんのカワニナがいたよ

水路の水、冷たくておいしい!!

山際の水路は草が小川にしなだれいかにもホタルがいそうな感じのところでした。

子供たちは小川に網を入れてドジョウやカエルなどを追い回していました。

猿による農作物の被害を食い止めるための工夫などのお話を聞きながら帰路につき神社脇の水路の山水を手ですくって喉をうるおしたあと公会堂へ向かいました。

築井さんから「ホタルの生態」についての説明

田貝地区公会堂では、築井さんから田貝地区での取り組みやホタルの一生について説明をいただきました。田貝地区ではホタルの舞う時期に観察会を開催し、毎年２５０人以上が集まるそうです。また、ホタルの成長にあったエサとなるカワニナを増やすため、カワニナの棲みやすい環境づくりにも取り組んでいました。

質問タイムには「佐々木地区にホタルを呼び戻すことは出来ますか？」「どのくらい農薬を使うとホタルに影響がありますか？」など子供達からたくさんの質問があり、「地域全体を整備することは無理かもしれないけど、公園などにホタルが棲める環境をつくることは出来ると思います」「昔と違って農薬の毒性が弱くなっているため、ここ田貝のように常にきれいな水が流れていれば農薬を使っても大丈夫です。ただし、水がゆっくりと流れたり、滞ってしまう場合には、影響が出る可能性がありますね」などとわかりやすく回答していただきました。

みんなで古太田川にカワニナを放流!!

１１時に田貝地区のお二人に別れを告げて佐々木に戻ると、最後は古太田川にカワニナを放流して解散となりました。カワニナと一緒にホタルの幼生を捕まえた子もいたので、来年の夏には、もしかすると古太田川でホタルを見ることが出来るかもしれません。それまでには、少しでもホタルが棲みやすい環境を整えてあげられるよう、子供達にも頑張って欲しいですね。

次回は、ついに佐々木地区の将来を描きます。み～んなで、参加してくださいね!!

佐々木地区ワークショップとは？

事業名称：こどもたちの農業・農村体験学習推進事業

発 注 先：水土里ネット佐々木（佐々木土地改良区）

受 託 者：特定非営利活動法人 加治川ネット２１

事業目的：佐々木小学校の子供たちは「古太田川における人と自然の共生」をテーマに総合学習（環境学習）に取り組んでいる。この事業は、この環境学習の活動を支援することを目的とする。

加治川ネットの役割：上記事業の目的の達成に向けた動植物の調査活動等を基本とした環境学習の支援。

加治川の天然プール、最高！

７月２５日、加治川ネット主催の水辺の大楽校が新発田市岡田の天然プールで開催されました。

今年、この事業は新潟県新発田地域振興調整会議「加治川の恵み」の一環として委託されたものです。

今回は、子ども１８名、大人１７名が参加し、新発田地域をはじめ遠くは長岡市、新潟市からの参加者もありました。　開会あいさつの後、水生生物調査担当：藤田さん、昆虫担当：永野さん、植物担当：植木さんから探検隊での注意事項や調査の進め方などのお話がありました。

シマドジョウ、メダカ、いっぱいいるね

名誉の負傷「ヒルの吸血あと」

最初に行った田んぼの生き物ではメダカ、シマドジョウ、アメンボ、ヤゴ、トノサマガエル、オタマジャクシ、ヒルなどの生物を捕獲しました。

気温はグングン上がり、加治川を調査する頃には３３℃くらい、加治川は田んぼ脇の用水より流れも速く、水温が冷たいので子どもたちは生き物調査もそこそこに水遊びに興じていました。

また、今年は新しい試みとして、アユ、ヤマメのつかみ取りを企画しました。子供たちは、加治川に作った即席の生け簀に入り魚たちと格闘しやっとの思いで捕まえた魚をサポーターの人たちに櫛通しをしてもらい、お昼のスペシャルメニューの下準備を自分たちで体験しました。

１１時頃から植物の押し花と食用にする雑草探しをしました。１７日、加治川でも警戒水位を超える豪雨があり、めぼしい草花はほとんど流されていましたが、それでも土手にあるクズの花やヨモギを摘むことができました。

くさい葉っぱ発見、ヘクソカズラ！

オリジナルの押し花ハガキの作成

お昼には、加治川の恵みである食材のヨモギの葉の天ぷらと、アユの塩焼きとトン汁で豪華にランチタイム。

午後からのメニューは、あまりの暑さのためすべて水遊びタイムとなりました。加治川をボートで下りライフジャケット泳ぎなど楽しみました。

こんなにすばらしい加治川の天然プールは、新発田市民の宝であり子供たちのワンダーランドであることは、間違いありません。

新潟市立大淵小学校4年1組『体験授業』

加治川・五十公野公園探検隊

８月２１日（土）、新潟市立大淵小学校４年１組の学年行事「加治川・五十公野公園探検隊」が、加治川天然プールと五十公野公園を会場に開催されました。

この事業は、小学校行事の水辺体験を加治川ネット２１に委託されたものです。開催日は、晴天だったのですが台風の影響で、不安定な天候のため加治川天然プールと五十公野公園の探検隊となりました。

はじめに加治川ネットスタッフの藤田さんから天然プールと田んぼの水路での生き物調査の説明と注意事項が話されました。続いて永野さんから昆虫の話、植木さんから草花の話があり一通りの説明が終わると待ちに待った探検隊が開催されました。

田んぼでの生き物捕獲

加治川での魚つかまえ

天然プールでの水遊び

全員で網を持ち加治川脇にある田んぼでのドジョウすくいの始まりです。スニーカーのまま土水路に入った子どもや岸辺から足元を気にしながら怖々手を伸ばし生き物をつかまえている子供たちなどいろいろです。子供たちは、網にメダカやドジョウが入ると歓喜をあげて喜んでいました。

しばらくして、天然プールに戻ったとは、生き物をつかまえる班と川遊びする班、泳ぐ班といろいろなコースに分かれて天然プールならではの楽しさを満喫していました。１１時頃に天然プールでの時間はおわり、藤田さんからつかまえた生き物のまとめを行い、五十公野公園に移動しました。

ます潟の多くの生き物たち

五十公野公園では、サンワーク新発田に荷物を置いた後、ます潟に事前に仕掛けておいた罠を引き上げ、潟に棲む生き物をたくさんの見ることが出来ました。またその中にブルーギルが混じっていたのにはみんなビックリしていました。

昼食前に藤田さんと永野さんから水生生物のまとめとして『加治川・田んぼの用水・潟』の生き物の違いと水環境などの話がされました。

午後からは、里山である五十公野公園のます潟周辺の園路と湿原地帯の草・花・木、を五十公野公園植物図鑑をもって観察学習をしました。また、園路を歩いている途中に自分のお気に入りの草や葉を持ちかえって押し花絵はがきを作る工作を行いました。親子で作った思い思いの絵はがきは良い記念になることでしょう。

子供から「加治川でもっとたくさん遊びたかった」との感想が多く寄せられました。やはり子供たちは、加治川での水遊びがおもしろかったようです。今度また、みんなで加治川の天然プールに遊びに来て下さいね。

日本一きれいな川『荒川』

８月３日、荒川全川一斉水辺の健康診断事業「あらかわ清流大発見」が山形県・新潟県の主催で行われました。この事業は、山形県、新潟県を流れ日本海に注ぐ荒川を両県のこども達が協力して水生生物の生息状況から「水のきれいさを調査」することが目的の事業です。

新潟県調査地点：温泉橋下

そっと、川石の裏を探ります

今回の事業は荒川流域の町村から両県合わせて３５名の小・中学生の参加で開催されました。調査個所は、午前下流域新潟県関川村温泉橋下と午後から上流域山形県小国町五味沢かじか橋下の２個所です。

新潟県の開催に際し、はじめに新潟県県民生活・環境部環境対策課　猪股係長、山形県環境保護課　柴田環境保全専門員、当会　若月理事長から挨拶がありました。続いて当会　藤田理事より水生生物調査の概要と生物の捕らえ方、注意点などの説明があった後、両県混成の６チームで水生生物調査が開始されました。

各班は、上流や下流側に散り散りに調査を始めました。子供たちは、カワゲラやトビケラ、カワトンボなど一生懸命に川石を持ち上げ石の裏を調査しました。

調査結果は、班の各担当者により判定されこども達は記録用紙に記載していました。調査の結果は「きれいな水質の川」であると云うことでした。調査が終わった後の昼食には、加治川ネットスタッフ焼きたてのアユなど川魚の塩焼きを食べました。また、魚のお代わりする子もあり塩焼きはとても好評でした。

昼食後、一路山形・小国町五味沢リフレまで移動し、「かじか橋」下流床固めの落差工の下で水生生物調査が行われました。水温は思ったほど冷たくなく関川調査地点よりあたたかい感じがしました。

子供たちは石をはぐり川虫を探すのですがなかなか見つかりません。地元の人は、７月の豪雨で川石が流され川虫が少ないと言っていました。上下流全体的に川虫の捕獲数は少なかったのですが「きれいな水質の川」と言うことがわかりました。また、漁協の人が投網での魚捕りと岸辺でのカジカの捕りかたなど実演してくれました。投網で獲れた魚はイワナ、ヤマメなど渓流に棲む魚でした。

外での調査を終え、リフレにて屋内での全体のまとめ作業です。各班に分かれ今日の調査結果を大きな紙にまとめ山形県環境保護課の職員さんから説明を受け、山形県かじか橋地点、関川村温泉橋地点においては「きれいな川」であることが実証されたと報告されました。

この事業の締めとして元小国高校校長先生と国土交通省羽越河川国道事務所調査課　佐々木さんから「荒川の歴史」と「生き物」についてのお話がありました。

０４年７月に国土交通省から「日本一きれいな川」であると発表されたきれいな荒川を今回山形県・新潟県の両県の子供たちが県境を越え、共同で調査したことでお互いの地域を知ること出来ました。この事業をとおして子供たちが荒川の上流と下流を理解し地域の財産として荒川をいつまでも日本一きれいな川のまま引き継いでいってもらいたいものです。

朝早くから一日、参加したみなさん本当にご苦労様でした。

ご苦労様でした。ハィ、ポーズ

加治川に生息する魚たち(技術部通信)

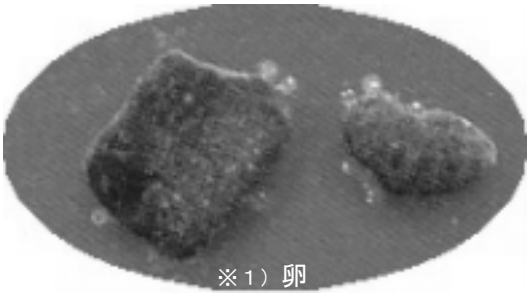
第5回　鮎(アユ)

※藤田　利昭

夏季の鮎･･･食べると美味で最高です

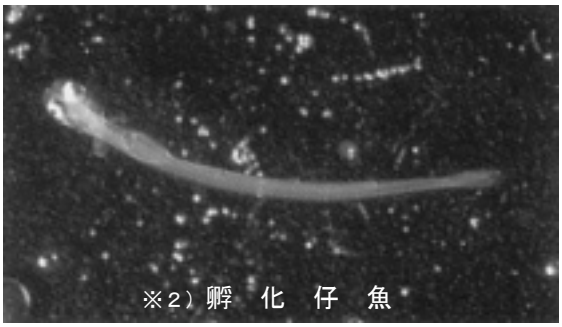
友釣り、簗場で有名なアユは清流を代表する夏の魚で、日本の川魚の中でもっとも美味といわれています。加治川でも中流域を中心に広く分布しています。みなさんは、このアユが今まで紹介したカジカ、イワナ、ヤマメと同様に海で生活する時期があることをご存知でしたか？

アユの産卵期は秋です。産卵期のアユを落ちアユといって、食品としての価値は少々下がりますが、まるで太ったシシャモのようにお腹に卵が詰まった雌アユを好む方も多いようです。新潟県では９月末から１０月にかけて中流域の砂礫に粘着性の卵を生みます。


※1）卵

砂利の中の卵は10～15日後にふ化し、川の流れに身を任せて海まで降ります。このときふ化した稚魚(ふ化仔魚：全長５～６㎜)はまだ餌をとることができないうえ、河川内には餌となる動物プランクトンがほとんどいません。では、アユのふ化仔魚はどうやって生きていくのでしょう。

実は、アユのふ化仔魚はお腹に３日分のyolk(卵黄)つまりお弁当を持って生まれてきます。このお弁当がなくならないうちに餌のプランクトンが豊富な海に降りなければ餓死してしまうのです。ふ化仔魚は泳ぐ力がなくただ流されるだけなので、各種用水などに迷い込むと死んでしまいます。河川水の利用もほどほどにしないとアユが海に降れなくなってしまいます。


※2）孵　化　仔　魚

海に降ったふ化仔魚は翌春全長７～８cmになるまで沿岸域で過ごし、新潟県では雪解けの影響が薄れる連休明け頃、群れになって川を遡上します。このころのアユはまだ積極的に昆虫類を食べます。川を遡上し、成長するにつれて川底の石に付着した苔(ケイソウなどの植物プランクトン)を食べ、アユ特有の香りを持つようになります。

この川底の石をめぐってなわばりを形成し、侵入魚に体当たりするため、アユ独特の漁法である友釣りが可能になるわけです。

夏、清流でたっぷりと苔を食べたアユは、秋に産卵し、その一生を終える年魚(寿命が1年)です。スーパーで売っているアユは、そのほとんどが養殖ものですが、天然アユにめぐり合う機会があれば、短いながらも波瀾に富んだ一生に思いをはせて味わってみてはいかがですか？

※技術士（水産部門）・1級ﾋﾞｵﾄｰﾌﾟ計画管理士

写真）※１、※２　『川の生物図鑑』（財）リバーフロント整備センター

編集後記

初冬の候、ますますご健勝のことお喜び申し上げます。

今号を発行の編集委員会を終え、帰宅した途端新潟県中越地方を震源とする大きな地震があり、甚大な被害が当地ではあまり甚だしくなかったようにみえますが、震災を受けた地域の見舞い申し上げます。

今回の会報を作成するにあたりお世話になった方々に金をおくり、待ち夏季よりいろいろ続いた受託事業３件も無事終了しました。残る佐々木地区小学校の子供たちが夢見る『ホタルの舞う古太田川』を現実化させるため、頑張ってお手伝いするつもりです。

報告文協力
遠藤綿子
遠藤利昭
若藤田月
斉藤由美子
篠田令子
（大淵小学校４学年ＰＴＡ役員）

写真協力
山形県環境保護課
肥田野繁晴
遠藤綿子
田代和吉
若辺学
渡会報編集委員会
利道
月
田
斉藤
篠田
藤田
遠藤
ささんん